



図113 茶院遺跡 北東から 背後は北陸自動車道



図112 遺跡の位置
5万分1地形図「弥彦」

茶院遺跡 西蒲区打越

茶院遺跡は、西川と中ノ口川の間広がる平野の中央を流れて下り、かつて鍔湯よろいがたに注いでいた大通川おとろりがわの右岸にある。標高約二・一メートルの微高地に立地し、大通川とは約七〇〇メートル離れている。古老の話によれば、遺跡周辺は昔から「茶院の森」と呼ばれる荒廢地で、暴れ者の大男「モス」を退治して埋めたと伝えられる塚や、東西に流れる川、火葬場があったという。

昭和二十五（一九五〇）年ごろ、燕町の真島衛氏が西蒲原郡内の遺跡分布調査を行い、ここで須恵器すえきを採集したことから古代の遺跡と分かった。遺跡一带は、昭和三十年代の耕地整理で、畑地や塚が削られ、低い土地が埋められて水田化された。その際、須恵器や土師器じき、人骨などが多く出土したが、現在は残っていない。昭和四十年代ごろまでは、奈良時代以降の遺跡調査は、鉄などの生産遺跡、官衙かんが（役所）遺跡、寺院跡が中心で、一般集落と見られる遺跡が調査されることは少なかった。また、須恵器や珠洲焼すずなどの歴史時代の土器の研究者も少なかった。



図114 出土須恵器 左から横瓶、壺蓋、坏、短頸壺

越後平野で、奈良時代以降の低地の遺跡が本格的に発掘調査されるようになったのは、北陸自動車道の建設に伴う発掘調査が実施されてからであった。市域では、四十七年に江戸時代の墳墓である大墓遺跡^{おおばか}と、平安時代の釈迦堂遺跡^{しゃかどう}（二二八ページ）、四十八年に茶院遺跡が新潟県教育委員会によって発掘調査された。

茶院遺跡の発掘区域は、耕地整理が行われた場所だったためか、住居跡や井戸などの遺構は見つからなかった。しかし、須恵器の坏^{つみ}・坏蓋^{つみかた}・甕^{かめ}・壺^{つぼ}・横瓶^{よこびん}、土師器の長胴甕^{ながたねがみ}・小甕^{こがみ}・銅^{なべ}など様々な遺物が出土した。

これらは食器・貯蔵器・炊事などの日用品である。高級な遺物がなかったことから、茶院遺跡は普通の集落であった可能性がある。また、須恵器・土師器の形などから、八世紀後半から九世紀前半までの短期間の集落であった可能性がある。

茶院遺跡では、ほかに、古墳時代と見られる土師器、室町時代の珠洲焼、江戸時代の陶器もごく少量出土した。これらの遺物は、わずかな微高地を頼りに、平野のまっただ中で何度か人が住み着こうとした時の遺物かも知れない。出土品は、打越にある「澤将監の館」^{さわしょうげん}の資料館に展示されている。